

# がんセンターたより

当センターでは、がん医療の研究を推進しており、その活動の一環として職員が学会に参加をしています。今号では、その一部を紹介します。

## 学会報告

### NUS-Kanagawa Symposium 2023

2023年9月4日～5日 シンガポール

臨床研究所 小井 詰 史朗

神奈川の国際展開支援事業（シンガポールミッション）の一環として行われたシンポジウムに参加させていただきました。シンポジウムではシンガポール国立大学（National University of Singapore (NUS)）と県内のがん研究機関である横浜市立大学、実験動物中央研究所、神奈川県立がんセンター臨床研究所の所属の研究者により研究発表が行われました。当研究所からは、報告者を含め4名の研究者が発表して活発な議論が行われました。ホストであるNUSの研究発表を始めハイレベルな研究内容に触れ、刺激を受けたのに加えて新たな研究者間のネットワーク構築に繋がったと思います。今年の日本の夏は猛暑で現地の高温多湿気候とよく似ているように感じましたが、最終日にスコールを体験し、東南アジア訪問を実感しました。今回のシンポジウム参加が将来の共同研究推進等今後の研究発展に繋がるよう努力して参ります。



### EAUOS

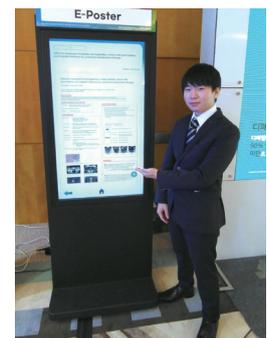
2023年9月15日～16日 韓国 仁川

泌尿器科 山本 章太郎

2023年9月15、16日と韓国仁川で「East Asia Urological Oncology Society (EAUOS2023)」が開催され、当科臼井医師と共に本学会に参加させていただきました。「Effective treatment of bladder micropapillary variant with gemcitabine and cisplatin followed by avelumab maintenance therapy」の内容で、膀胱癌（micropapillary variant）術後再発に対してGC療法、Avelumab維持療法が有効であった症例について発表して参りました。本学会は韓国・台湾・日本の泌尿器科医を中心に、アジアにおける泌尿器癌領域での国際学術交流の活性化を目的したものであり、トピックレクチャーや集学的なケースディスカッションもあり、大変興味深い内容でした。各国の教授から若手医師まで発表されており、活気があり刺激的な学会に参加したことを実感しました。本学会での発表の機会をいただけたことに感謝し、海外学会で発表した貴重な経験と本学会で吸収した知識を今後の診療に活かしていきたいと思っております。



▲臼井 公紹



▲報告者：山本 章太郎

# 診 療 科 紹 介

## サルコーマセンター

サルコーマセンター センター長 比留間 徹

サルコーマセンターは単一の診療科ではありません。肉腫という疾患群の診療に関わるすべての部門がサルコーマセンターのメンバーと成りえます。

「希少がん医療・支援のあり方に関する検討会」の報告書（厚生労働省 2015年8月）で、わが国の希少がんを「概ね年間の罹患率（発生率）が人口10万人当たり6例未満」のがん種と定めています。肉腫もこの条件に当てはまりますが、報告書に加えられているもう一つの、「数が少ないため診療・受療上の課題が他のがん種に比べて大きい」疾患群が肉腫にはしっくりくる定義です。身体各部位や各臓器に発生するもののその頻度は少なく、それらを統括する部門、つまり「横のつながり」がなかったために課題が大きかったと考えられます。

肉腫に限らずがん治療の主役は外科的切除でありました。そのため歴史的には身体の各部位の診療科が携わってきたことは無理もないことです。しかし近年、各種薬物治療や放射線治療の進歩により治療の選択肢も増えてきました。肉腫治療においても、2016年から粒子線治療（陽子線・重粒子線）が公的保険適用となり、遺伝子パネル診療の発展などにより、種々の肉腫の特徴が明らかになってきました。

肉腫診療において各部門の「横のつながり」を担っていくのがサルコーマセンターです。悩んでいる肉腫患者さんや診療機関の窓口となり、必要に応じて当施設の各部門と相談しながら診療に当たります。肉腫の診断・治療でお困りの際には、直接サルコーマセンターに、あるいは骨軟部腫瘍外科へご相談ください。

## リハビリテーション科

リハビリテーション科 部長 佐久間 藤子

最近の医療技術の進歩による生存率の向上により、がんは「不治の病」から「共に生きる」時代へと変化してきています。そんな時代のリハビリテーション医療は、がんサバイバー（がん治療を終えた方だけでなく、がんと診断されたばかりの方や、治療中や経過観察中の方なども含む、全てのがん体験者のこと）の生活と治療を支える役割を担っており、そのニーズも確実に高まっています。

当科は院内共通診療科として、入院患者さんを中心に、院内ほぼ全ての診療科から、年間延べ約1,400名のコンサルテーションを受けています。がんとその治療過程で受けた身体的および心理的な様々なダメージに対して、患者さんがそれぞれの家庭や社会へ、なるべく早く戻れることを目指して、リハビリテーション科専門医の他、リハビリテーション専門職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）や看護師、医療ケースワーカーなど多職種で協同して、身体精神機能評価、リハビリ訓練、家族指導、社会的支援調整等を行っております。



## ブラックジャックセミナー開催報告

呼吸器外科 部長 伊藤 宏之

12回目のブラックジャックセミナーを、コロナ禍で4年ぶりの開催を8月5日に行いました。定員の倍を超える応募あり、49人が当選しましたが、発熱等の当日キャンセルもあり、42人が参加、ほぼ同数のご家族縁者も集まりました。酒井病院長、森本副院長はじめ医療局、看護局を中心に幅広い部門に応援をいただき、縫合実技、内視鏡手術練習、自動縫合器、超音波メス、手術室での手術体験、重粒子加速器見学、病理体験に加え、今回初めての肝臓超音波体験を行いました。久しぶりの対面集合形式の影響もあり、最初は緊張した面持ちだった子ども達ですが、すぐに笑顔と驚きの声に変わりました。多くの質問とともに、感激と感謝の言葉もいただきました。今年も対象を中1～高2と高学年としたため、実習により深く集中でき、理解も深められたようです。外科医の普段の生活、技量の上げ方から医学部入学に向けた勉強方法の質問など、意欲にあふれた子どもが多い印象でした。またお礼の手紙も頂戴し、このセミナーをきっかけに、子ども自身が将来の職業像を描き、それに向けた意欲の向上を見せたことなど、参加した子ども達だけでなくご両親も感激したとの内容でした。休日にもかかわらずお手伝いいただいた方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

縫合実習



病理実習



肝臓超音波実習



重粒子加速器見学



## がん細胞を探し出せ！開催報告

臨床研究所 星野 大輔

神奈川県が企画する“かながわサイエンスサマー”の一環として、臨床研究所で、中、高生を対象とした科学教室“がん細胞を探し出せ！”を8月1日に開催しました。

今年も145名の応募があり、抽選を実施しました。当日は、21名の参加者に、細胞って何？、遺伝子って何をしているの？、ということから、遺伝子とがんの関係まで講義をしました。その後、研究所でピペットを使ってPCRから電気泳動まで行い、実際に行われている法医学的なDNA鑑定を体験していただきました。最後に、臨床研究所ツアーを実施し、顕微鏡で癌組織の観察や最先端の機器にふれることで、実際のサイエンスの現場を体験していただき、アンケート結果も大変好評でした。

今回の体験が子ども達にとって医学に対する興味を持つきっかけになればと臨床研究所職員一同願っております。

病理実習



# がんの遺伝診療に AI を活用しています

遺伝診療科 部長 成松 宏人

遺伝性乳がん卵巣がんといった遺伝的要素の強いがん（遺伝性腫瘍）の存在が知られるようになり、多くの方に遺伝カウンセリングをはじめとするさまざまな医学的対応が必要になってきました。必要な患者さんはこれからも増



▲ AI システム使用のイメージ  
(患者役は職員(成松)がつとめています)



▲バーチャル遺伝カウンセラー「アイ」

えていくことが予想されていますが、増えていく患者さんに遺伝診療をお届けするために、遺伝診療科では人工知能(AI)を活用した遺伝診療システム\*を導入しました。これは、LINE上のバーチャル遺伝カウンセラー「アイ」と会話していただくことで、遺伝性腫瘍の可能性を評価できます。結果は各診療科の担当医が確認し、必要に応じて遺伝診療科と連携をとります。

すべての患者さんに遺伝診療を届けられることを目指して、今後さらに、機能を充実させるための開発を継続していきます。

\*「遺伝カウンセリング支援システム」特許 7213501

看護局  
より

## ナイトインターンシップ 一日看護体験「キラリ！看護のシゴト」

### ● ナイトインターンシップ 副看護局長 平井 直美

多くの看護学生や既卒看護師に、がんセンターの看護を知ってもらう目的で、9月～10月に、18時スタートの病院説明会を実施しました。

今後も一緒に働く仲間を増やすため、がんセンターの看護を発信していきたいと思えます。

### ● 一日看護体験「キラリ！看護のシゴト」～看護師を目指す高校生が参加～

7月28日(金)がんセンターにおいて、1日看護体験を開催しました。看護に関心のある高校生18名が参加し、点滴作成や足浴の見学、血圧測定、車いす移送体験等を通して、看護師の役割や仕事の理解を深める機会となりました。参加者からは、「大変楽しかった」「看護師になりたいというモチベーションがあがった」等の声が聞かれ、将来、看護師の道に進んでくれるのではないかと期待が膨らみました。



ボランティア  
コンサートの  
実施報告

10月5日(木)新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを受けて、3年

ぶりに★ボランティア団体・ランパス会★による、「木曜ミニコンサート」を開催しました。

今回は、国内・外で幅広く活躍されているピアニスト鮫島明子さんをお招きし、ピアノ独奏を行いました。愛の挨拶からトルコ行進曲など7曲で、あっという間の30分間となりました。

通院中の患者さんやそのご家族が、ピアノ演奏の音色に耳を澄ませ有意義なひと時となりました。副看護局長 鳴原 まゆみ

## 新任の紹介

職員の異動がありましたので、ご紹介いたします。よろしくお願ひします。



副事務局長兼総務企画課長  
原田 麻子



放射線治療科  
医長 川城 壮平



消化器外科(大腸)  
医師 内山 護



内分泌外科  
医師 角谷 芽依

## 編集後記

猛暑からようやく秋の気配を感じる今日この頃ですが、コロナに続いてインフルエンザのダブルパンチ、皆さまも相変わらず気が抜けない日々ではないでしょうか。それでも今回のたよりでは対面式のイベント復活として、お子さん向けのブラックジャックセミナー、若者向けの一日看護体験、ボランティアによる院内コンサートなど、地域交流の様子をご紹介できました。医療機関の皆様とも来年には対面式で連携の会を企画中です。オンラインでなく直接顔の見える関係が暖かい医療には不可欠であり、AIにはできない血の通った交流が我々医療者の矜持であると改めて感じます。「たより」を通じてその空気を感じていただければ幸いです。

副院長 地域連携室長 岸田 健

編集・発行

神奈川県立がんセンター  
〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2

TEL 045-520-2222(代)  
https://kcch.kanagawa-pho.jp/

